

## 聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服VI

### 第1回 「自分を信じること」が誘惑克服の最終段階

#### 1 誘惑の本質

人間はなぜ、繰り返し同じ誘惑に負けるのでしょうか。意志の問題でしょうか。それとも環境の問題でしょうか。聖書はその答えを、より深い次元に求めています。

これまで本シリーズでは、悪の誘惑の構造とその克服について段階的に考察してきました。

誘惑は単なる外的な悪の働きではなく、人間の内面に働きかける力であり、恐れ、欲望、習慣、そして環境や人間関係を通して人を支配しようとするものであることを明らかにしてきました。

そして最終的に、人間がその支配から解放されるためには、主体性を取り戻すことが不可欠であることを確認してきました。

ここで一つの重要な問いが残ります。それは主体性を取り戻した状態とはどういう状態かということです。

単に自分で考え、自分で選択することができれば、それで十分なのでしょうか。それともさらに深い段階があるのでしょうか。

本稿では、この問題に対して「自分を信じること」という命題を手がかりとして考察していきます。

#### 2 誘惑は内面の欲と結びついて成立する

まず確認しなければならないのは、聖書において誘惑とは何であるかという点です。ヤコブの手紙には次のように記されています。

人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。（ヤコブの手紙1章14～15節）

ここで明確にされているのは、誘惑に陥る原因が外部ではなく内部にあるという事実です。すなわち、誘惑に陥るといえるのは外から押しつけられるものではなく、人間の内側にある欲や思いに引かれた結果なのです。

この点は、創世記における墮落の記述とも一致しています。エバは蛇との対話

の中で、善悪を知る木の実を「食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい」（創世記3章6節）と思いました。

ここでも外的な強制は存在しません。むしろ、内面の欲求が刺激され、それに応じる形で行動が決定されています。したがって誘惑の本質は、外的な圧力ではなく内的な反応にあると言えます。

### 3 主体性の喪失としての誘惑

このように考えると、誘惑の本質は単なる罪の誘いではなく、「主体性の問題」であることが見えてきます。すなわち、人間がどこに基準を置いて物事を判断し、決定するのかという問題です。

神のみ言に基づいて決定するのか、それとも自分の欲や周囲の影響に基づいて決定するのか。この選択こそが、主体性の問題としての誘惑の具体的な内容です。

ここで重要になるのが、人間の内面における分裂です。使徒パウロは次のように述べています。

わたしは自分のしていることが、わからない。なぜなら、わたしは自分の欲する事は行わず、かえって自分の憎む事をしているからである。（ロマ書7章15節）

この言葉は、人間が統一された内面を持つ存在ではなく、内的に分裂した存在であることを示しています。

理性や良心が善を求めながらも、欲や習慣がそれに逆らいます。誘惑とは、この内的葛藤に乗じて成立するものです。

### 4 「自分を信じること」の「自分」とは？

したがって、誘惑に陥らないためには、この内的な分裂を克服し、自らの主体性を確立することです。

ただし、ここで注意すべきは、単に「自分の意思を強くする」ことが解決ではないという点です。なぜなら、その自分自体が分裂しているからです。

欲に支配された自己を強化すれば、それはかえって誘惑に従う力を強めることになります。ここで「自分を信じること」という命題の意味が明らかになります。

これは、すべての自己を無条件に肯定せよという意味ではありません。そうではなく、神に基づいた自己、すなわち良心に導かれた自己を信じるという意味です。

言い換えれば、今の自分を信じるのではなく、神のみ言に従う自らの主体性を

確立した自分を信じるということです。そして、神の恩恵と導きにより、その境地に到達できると信じることです。

## 5 信仰の成熟としての自己信頼

この点において、自分を信じるという段階は、信仰の初歩ではなく、信仰が深く成熟した段階に属すると言えます。

信仰が進み、神のみ言が心に深く根づくとき、人間の内には新しい基準が形成されます。

使徒パウロが「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」（ガラテヤ2章20節）と語るとき、それはまさにこの状態を指しています。

この段階において初めて、「自分を信じること」が可能となります。なぜなら、その「自分」はもはや単なる自己ではなく、神の意志と一致した自己だからです。

この変化は、自ら意志を強化することによってではなく、み言との継続的な接触と神との関係の深まりの中で、内面の基準そのものが入れ替わっていく過程として生じます。

ここに至って、人間は外的な影響や内的な欲に振り回されることなく、確固たる主体性を持った自分として立つことができます。

## 6 結論

以上を踏まえると、「自分を信じること」という命題は、誘惑克服の最終段階に位置づけられることが分かります。

それは単なる精神論ではなく、内的分裂を乗り越え、神に基づいた主体性を確立した者にのみ成立する実践的原理です。

今回は、この「自己否定」と「自己信頼」という一見矛盾する教えをさらに掘り下げ、聖書全体の中でどのように統合されるのかを考察していきます。

## 第2回 聖書における自己否定と自己信頼

### 1 聖書はなぜ自己否定を求めるのか

本シリーズの第1回では、「自分を信じること」という命題が誘惑克服の最終段階に位置づけられることを確認しました。

ここで聖書における一つの重要な問題に直面します。それは、聖書が繰り返し「自分を捨てよ」と教えているという事実です。イエスは次のように語られました。

だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。（マタイ福音書 16 章 24 節）

このみ言は、信仰の出発点として自己否定が不可欠であることを明確に示しています。

また旧約聖書も、「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない」（箴言 3 章 5 節）と教えています。ここでも自分自身の判断や理解に依存することが否定されています。

このように聖書全体を通して見られるのは、そのままの自分に依拠することに対する強い警告です。すなわち、聖書はまず「自分に頼るな」という立場から出発しているのです。

### 2 自己信頼は誤りなのか？

もし聖書が徹底して自己否定を求めているのであれば、自分を信じるという考え方は誤りなのでしょうか。

この問題を考えるとき、聖書が否定している「自己」と、信仰によって形成される「自己」とを区別して考える必要があります。

聖書が否定しているのは、「すべての自己」ではありません。神のみ旨よりも自分の欲望や考えを優先する自己、すなわち神を中心としない自己を否定しているのです。

人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。（ヤコブの手紙 1 章 14～15 節）

ヤコブの手紙が述べているように、このような自己は欲によって容易に誘惑へと引き込まれてしまいます。

このような自己に依拠することは、結果的に誘惑に従うことにつながるため、自己信頼は確かに危険であり、聖書がそれを警戒するのは当然と言えます。

一方で、聖書は人間の内に新しい自己が形成されることも示しています。使徒パウロは次のように語っています。

**生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。（ガラテヤ2章20節）**

ここには、欲や恐れに支配される古い自己とは異なる、新しい自己の成立が示されています。ここに「自己否定」と「自己信頼」の関係を理解する鍵があります。

### 3 否定される自己と肯定される自己

この問題を正しく理解するためには、「自己」という言葉を区別して考える必要があります。つまり、否定されるべき自己と、肯定されるべき自己が存在するということです。

否定される自己とは、神から切り離された自己です。この自己は、自分の欲望や感情、あるいは周囲の影響に従って動きます。そのため、判断の基準が常に揺れ動き、誘惑に対して抵抗力を持つことができません。

これに対して、肯定される自己とは、神に基づいて形成された自己です。この自己は、神のみ言を内面化し、良心を通して神の意志を受け取ることができる主体です。この段階で人間の内には新しい基準が確立されます。

パウロは、「あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである。」（エペソ4章22～24節）と述べています。

ここで語られているのは、単なる行動の修正ではなく、自己の質的転換です。古い自己が否定され、新しい自己が成立しているのです。

### 4 神に基づく自己の成立

このように、自己否定は自己消滅を意味するものではなく、自己の再構成を意味します。すなわち、神に基づかない自己を否定することによって、神に基づく自己が成立するのです。

コリント人への第二の手紙5章17節には、「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」とあります。

古いものは過ぎ去り、新しいものが生まれているという事実は、自己否定が終点ではなく、新しい自己の出発点であることを示しています。

この過程を経て初めて、自分を信じるということが正当な意味を持つようにな

ります。なぜなら、その「自分」はもはや単なる自己ではなく、神の意志と一致した自己だからです。

この自己は、外的な圧力や内的な欲望に左右されることなく、正しい判断を下すことができます。

したがって「自己信頼」とは、自己中心的な自分を肯定することではなく、神を中心とする主体性の確立を意味します。

## 5 結論—信じるべきは神に基づいた自己

以上の考察から、「自己否定」と「自己信頼」は対立する概念ではなく、連続した過程の中にあるということです。

まず神に基づかない自己を否定し、そのうえで神に基づく自己を確立する、この流れの中で初めて、真の意味での自己信頼が成立します。したがって、信じるべきは単なる自己ではなく、「神に基づいた自己」です。

このように理解するとき、「自分を信じること」という命題は、聖書の教えと矛盾するどころか、その完成段階として位置づけられることが分かります。

今回は、「神に信頼される人間とは何か」という観点から、信仰の成熟についてさらに考察していきます。

## 第3回 神に信頼される人

これまで本シリーズでは、誘惑の克服が主体性の回復にあること、そしてその最終段階として「神に基づいた自己を信じる」ことの重要性を確認してきました。

ここでさらに踏み込んで、「神が人を信じるとはどういうことか」という問題について考えてみたいと思います。

### 1 神はなぜ試練を与えるのか

一般に信仰とは、人が神を信じることと理解されていますが、聖書をよく読むと、それだけではないことが分かります。

神は単に人から信じられる存在であるばかりでなく、人を信じ、任せようとされる存在でもあります。

この視点に立つとき、信仰は人が神を信じるだけの関係ではなく、神と人が信頼を築いていく相互関係として理解されるようになります。

このことを考えるうえで重要なのが「試練」という概念です。なぜ神は人に試練を与えるのでしょうか。

創世記の22章において、神はアブラハムに対して、ひとり子イサクをささげるように命じられました。

この出来事は単なる服従のテストではありません。その本質は、アブラハムがどこまで神に信頼し、また神がアブラハムをどこまで信頼して任せることができるとかを明らかにする過程です。

この試練の後、神は「あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」（創世記22章12節）と語られました。

ここで示されているのは、神が人を「知る」、すなわち信頼するに至るプロセスです。

ヘブル人への手紙11章17節も、「信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた」と記し、この出来事を信仰の実証として位置づけています。

ですから試練とは、神が人を排除するためのものではなく、むしろ信頼関係を確立するためのものなのです。

### 2 任される信仰とは何か

では、「神に任される」とは具体的にどういうことでしょうか。それは単に命令に従うこととは異なります。

命令に従うだけであれば、主体性は必要ありません。神が人に求めておられるのは、主体的に判断し、行動することです。

ヨブは大きな苦難に直面しながらも、神に対する信仰を手放しませんでした。

「主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」（ヨブ 1 章 21 節）というみ言は、苦難の中でも神との関係を失わなかった信仰の姿を示しています。

この姿は、命令に従うだけの受け身の信仰ではなく、苦難の中でも神との関係を保ち続ける主体的な信仰です。

このような信仰において、人間は単なる被造物ではなく、神と向き合う主体として立ちます。そしてその主体性こそが、「任される信仰」の条件となります。

神は、ただ従うだけの存在ではなく、信頼して任せることのできる存在を求めておられるのです。

### 3 神が人に委ねる基準

では、神はどのような基準で人に物事を委ねられるのでしょうか。その原則について、イエスは次のように語られています。

**小事に忠実な人は、大事にも忠実である。そして、小事に不忠実な人は大事にも不忠実である。（ルカ福音書 16 章 10 節）**

ここで示されているのは、信頼が段階的に築かれるという原則です。すなわち、日常の小さな選択や行動において忠実である者が、より大きな責任を任されるようになります。

これは人間社会においても同様ですが、神との関係においても同じ原則が働いています。信仰は一度に完成するものではなく、日々の積み重ねの中で形成されていくものです。

ここで重要なのは、見られているかどうかに関係なく忠実であることです。人の目を意識した行動ではなく、神との関係の中で一貫していることが求められます。

このような姿勢が積み重なるとき、人間の内には揺るがない基準が形成され、それが信頼の基台となります。

### 4 信頼される主体の形成

以上のことを踏まえると、「神に信頼される人間」とはどのような存在であるかが見えてきます。

それは、外的な状況や内的な欲望に左右されることなく、神に基づいた基準に

従って主体的に判断し、行動する人間です。

このような主体は、一朝一夕に形成されるものではありません。試練を通して鍛えられ、小さな忠実の積み重ねによって確立されていきます。

そしてこの過程において、人間は単に神に従う存在から、神に任される存在へと変わっていくのです。

ここにおいて、自分を信じるということの意味がさらに明確になります。

すなわち、それは単なる自己肯定ではなく、神に信頼されるに足る主体として確立された自己を信じるということです。

この段階において、人間は神との関係の中で真の自由と責任を持つ存在となるのです。

## 5 結論—信仰の成熟とは神に任されること

以上の考察から明らかになるのは、信仰の成熟とは、単に神に頼ることではなく、神に任される存在になることです。

試練はそのための過程であり、小さな忠実の積み重ねが信頼を築きます。そしてその結果として、人間は神と共に働く主体として立つようになるのです。

このように見ていくと、「神を信じる信仰」と「神に信頼される人間」は切り離されたものではなく、一つの流れの中にあることが分かります。

神を信じることから始まり、やがて神に任される存在に至る。この過程が、信仰における真の成長の道です。

今回は、誘惑の最終形態としての「依存」と「相談」という問題を取り上げ、現代社会における具体的な誘惑の構造について考察していきます。

## 第4回 誘惑の最終形態

これまで本シリーズでは、誘惑が単なる外的な悪の働きではなく、人間の主体性を揺るがす働きであることを見てきました。

欲望は判断を曇らせ、恐れは行動を制限し、環境や習慣は無意識のうちに人間を支配します。そして、そのような誘惑に打ち勝つためには、神を中心とする主体性の確立が必要であることを確認してきました。

ところで、誘惑にはさらに深い段階があります。それは、人間が神に求めるべきことを、神以外のものに求めるようになることです。本稿では、この問題について考察していきます。

### 1 誘惑の最終段階とは何か

多く的人是は、誘惑と聞くと欲望や罪への誘いを思い浮かべますが、聖書を見ると、誘惑の本質は単なる行動の問題ではありません。それは、どこに判断基準を置くのかという問題です。

人間は本来、神のみ言を基準として生きるように創造されました。しかし誘惑は、その基準を神から別のものへと移そうとします。

最初は欲望かもしれません。あるいは恐れかもしれません。しかしそれらに支配され続けると、人は神よりも先に別のものを求めるようになります。

その結果、人間は神との関係を中心として判断するのではなく、人の意見や環境、常識や世論を基準として判断するようになるのです。ここに誘惑の最終段階があります。

### 2 エバはなぜ墮落したのか

この問題を考えるうえで、創世記3章の墮落の出来事は非常に重要です。

一般には、エバが蛇の言葉にだまされたことが墮落の原因であると理解されています。それは間違いではありませんが、もう一步踏み込んで考える必要があります。

問題は蛇の言葉を聞いたことそのものではありません。本当の問題は、その言葉を神のみ言よりも優先して判断したことであり、エバが最後に神に尋ねなかったことにあるのです。

蛇は、「それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」（創世記3章5節）と語りました。

このときエバが、「天のお父様、蛇の言うことは本当でしょうか」と神に尋ねていたならば、結果は変わっていたかもしれません。しかしエバは神に尋ねませ

んでした。

神よりも先に蛇の言葉を判断基準とし、その結果として行動したのです。ここに墮落の本質があります。

墮落とは、神を否定することから始まったのではありません。神以外のものを先に求めることから始まったのです。

### 3 相談すること自体が問題ではない

ここで誤解してはならないことがあります。それは、人に相談することが悪いのではないということです。聖書にも助言を求めることの重要性を示す箇所があります。

**相談しなければどんな計画も挫折する。参議が多ければ実現する。（箴言 15 章 22 節・新共同訳）**

聖書は相談すること自体を否定していません。むしろ、独善に陥ることなく、他者の知恵に耳を傾けることの重要性を教えています。ですから、問題なのは相談の順序なのです。

何か問題が起こったとき、あるいは何か悩みがあったとき、まず神に祈り求めるのか、それとも最初から人に答えを求めるのか。この違いは非常に大きな意味を持ちます。

人は不安になると、すぐに誰かに相談したくなります。しかしそのとき、自分自身で神に真剣に祈ったのでしょうか。神のみ旨を求めたのでしょうか。神との対話を通して答えを求めたのでしょうか。

その過程を飛ばして人の意見を求めるならば、主体性は次第に失われていきます。なぜなら、その人の判断基準が神から人へと移ってしまうからです。

もちろん、神に祈り、自ら真剣に求めたうえで人に相談することは問題ではありません。むしろ必要な場合もあります。

しかしその場合でも、最終的な判断基準は神との関係の中になければなりません。ここに信仰における重要な原則があります。

### 4 現代人は誰に相談しているのか

この問題は現代社会においてさらに深刻になっています。

私たちは何か問題が起きると、まずインターネットで検索します。そして SNS を見て、専門家の意見を探し、世間の評価を確認します。

もちろん、それ自体が悪いわけではありません。問題は、それらが神よりも先に求められることです。

現代において、蛇の言葉が SNS や世論、専門家の意見そのものに置き換わったということではありませんが、それらを神よりも優先して判断基準にするとき、そこには創世記 3 章と同じ構造が生じるのです。

問題の構造は同じです。神よりも先に別のものを判断基準として求めている点において、SNS の時代も、エバが蛇の言葉に耳を傾けた時代も変わりはありません。

人間は依然として、神よりも先に別のものに答えを求めています。

その結果、主体性は失われ、環境や情報によって左右される人生になってしまうのです。

## 5 結論—神との関係が主体性を守る

以上の考察から分かることは、誘惑の最終形態とは、神以外のものを先に求める心ということです。

それは必ずしも悪意や反抗として現れるわけではありません。むしろ善意や不安、あるいは慎重さという形で現れることが少なくありません。

しかしその結果として、人間は神との直接的な関係を失い、他人や環境に判断を委ねるようになります。

主体性とは、自分勝手に生きることではありません。神との関係の中で自ら判断し、行動することです。そのためには、まず神に求めることが必要です。

人の助言を受けることはあっても、その前に神に祈り、神のみ旨を求めることが必要です。

神との縦的關係が確立されているとき、人は環境や人の意見に振り回されることなく、主体的に生きることができます。そしてその主体性こそが、誘惑に打ち勝つための土台となるのです。

今回は、「主体性の完成 — 神と一致した自己として生きる」というテーマを通して、本シリーズの結論を考察していきます。

## 第5回 主体性の完成

### 1 「自分を信じること」の最終定義

本シリーズでは、悪の誘惑の構造とその克服について段階的に考察してきました。

誘惑は外的な力ではなく内的応答の問題であり、その本質は主体性の喪失にあることを確認してきました。

そして最終段階において提示されたのが「自分を信じること」という命題でした。

この言葉は、よく自己肯定や自己中心的な生き方と誤解されますが、これまでの考察を踏まえれば、そのような理解は適切ではありません。

すでに見てきたように、聖書は欲望や恐れに支配される古い自己を否定すると同時に、新しい自己の成立を示しています。

**あなたがたは、古き人をその行いと一緒に脱ぎ捨て、造り主のかたちに従って新しくされ、真の知識に至る新しき人を着たのである。（コロサイ人への手紙3章9～10節）**

このように聖書は、単に自己を否定するだけではなく、神との関係の中で新しい自己が形成されることを教えているのです。

この流れで理解するとすれば、自分を信じるとは、神の意志と一体となった自分を信じるということです。

すなわち、神のみ言によって新たにつくられた自己を信じることこそが、本来の意味での自己信頼なのです。

### 2 神との一体化

このような自己が成立するとき、人間と神との関係は新たな段階に入ります。それは単に神に助けを求め、委ねるだけの関係ではなく、神と一つになり、その願いと目的を共有する関係です。

この関係を象徴的に示しているのが、ヨハネによる福音書15章のぶどうの木のとえです。

イエスは「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」（ヨハネ福音書15章5節）と語られました。

枝は木から生命を受けて生きていますが、同時に枝自身が実を結ぶ働きを担っ

ています。このように、神との一体化は主体性を失うことではなく、むしろ神に基づいた主体性を完成させる関係なのです。

ここにおいて、人間はもはや外から命令されて動く存在ではなく、内にある命に従って自然に実を結ぶ存在となります。

神のみ言が外的な命令としてではなく、内的な基準として働くとき、人間の行動は強制ではなく一致によって生まれるようになります。

この段階において、自分を信じることと神に従うことは対立しなくなります。なぜなら、自分の内にある基準そのものが神に基づいているからです。ここに信仰の完成形があります。

### 3 自由の再定義

このような状態において初めて、「自由」という概念が正しく理解されます。

一般に自由とは、制約からの解放や、自分の望むままに行動できる状態と理解されます。しかし、聖書は自由をそのようには定義していません。

イエスは「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネ福音書 8章 32 節）と語られました。

ここで言われている自由とは、単なる選択の自由ではなく、真理に基づいて主体的に判断し、行動することのできる状態です。

ローマ人への手紙 8章 15 節には、「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである」とあります。

恐れに支配される状態から解放され、神の子としての自由の中に立つこと—これが聖書の示す真の自由です。

この意味において、真の自由とは、神のみ言を基準として主体的に生きることが出来る状態であり、それは主体性の完成と一致します。

### 4 現代への適用

ここまでの考察を現代に適用すると、重要な視点が浮かび上がります。

現代社会は一見すると自由に見えますが、実際には多くの依存構造に満ちています。情報、評価、常識、空気といったものが、人間の判断を大きく左右しているのです。

そのような状況にいと、「自分を信じる」という言葉は、しばしば「自分の好きなように生きる」と同一視されますが、それは本来の意味とは異なります。

神に基づかない自己を信じることは、むしろ新たな束縛を生むことになりま  
す。

なぜなら、その自己は欲望や恐れ、他人の評価や時代の風潮に影響され続ける  
ためです。人はそれらに従っている限り、本当の意味で自由になることはできま  
せん。

したがって現代において求められているのは、単なる自己肯定ではなく、内的  
基準の再確立です。すなわち、神との関係の中で形成された自己に基づいて判断  
し、行動することです。

このとき、初めて外的な影響から自由になり、神と一つになった本来の自分と  
して主体的に生きることができるようになるのです。

## 5 結論—主体性の完成

以上の考察を通して、本シリーズの結論が明らかになります。誘惑の本質は主  
体性の喪失であり、その克服は主体性の回復にあります。

そしてその完成とは、単なる自己確立ではなく、神と一体となった自己として  
生きることです。

このとき、「信仰」「自由」「主体性」はそれぞれ別の概念ではなく、一つの  
現実として統合されます。

神を信じること、自分を信じること、そして自由に生きることは、同じ一つの  
状態の異なる側面となります。

したがって、真の主体性とは、神のみ言によって新たにつくられた自己として  
生きることであり、それこそが誘惑に対する最終的かつ究極的な克服です。

箴言は「正しい者は七たび倒れても、また起きあがる」（箴言 24 章 16 節）と  
語ります。

一度倒れたとしても、そこで終わるわけではありません。神のみ言を基準として  
繰り返し立ち上がる人こそが、主体性の完成へと近づいていくのです。

本シリーズはここで一区切りとなりますが、このテーマは信仰生活の中で継続  
的に深められていくべき課題です。

今後の歩みの中で、この理解が実践として確かめられ、神と共に歩む主体的な  
人生へと結実していくことを願います。

## 【補講】 ペテロはなぜ沈んだのか

### 1 水の上を歩くという奇跡

マタイによる福音書 14 章には、イエスが湖の上を歩かれた有名な場面が記されています。そのとき弟子たちは恐れ、「幽霊だ」と叫びました。

しかしイエスは、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」（マタイ 14 章 27 節）と語られました。するとペテロは次のように答えます。

「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください」（マタイ 14 章 28 節）

そしてイエスは「おいでなさい」と言われました。ペテロは舟から降り、水の上を歩いてイエスのところへ向かっていきました。

この場面を読むと、多くの人「奇跡」に注目しますが、この出来事は単なる超自然現象ではありません。ここには、信仰と主体性の関係が極めて象徴的に示されています。

特に重要なのは、ペテロが歩こうとしたのではなく、実際に歩いていたという点です。聖書は明確に「水の上を歩いてイエスのところへ行った」（マタイ 14 章 29 節）と記しています。

つまりペテロは、一瞬でも本当に水の上を歩いていたのです。ここにまず注目しなければなりません。

ペテロは不可能を可能にする世界に、実際に足を踏み入れていました。そしてその出発点となったのは、自分自身の能力ではなく、「おいでなさい」というイエスの言葉でした。

### 2 ペテロはなぜ歩くことができたのか

この出来事において、ペテロを支えていたものは何だったのでしょうか。それはイエスの言葉です。

ペテロは自分の力を信じて水の上を歩いたわけではありません。「イエスが命じられたなら歩ける」という基準に立っていました。

つまり彼は、自分自身ではなく、神の言葉に基づいて行動していたのです。ここに信仰の本質があります。

信仰とは、単なる精神力や楽観主義ではありません。また、「自分ならできる」と思い込む自己暗示でもありません。信仰とは、神の言葉を基準として立つことです。

ヘブル人への手紙 11 章 1 節は、「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、ま

だ見ていない事実を確認することである」と定義しています。

ペテロが水の上を歩けたのは、目に見える状況ではなく、イエスの言葉という見えない基準に立っていたからです。

この意味において、ペテロはこの瞬間、極めて強い主体性を持っていました。周囲の状況を見れば、水の上を歩くことなど不可能です。

しかし彼は、環境ではなくイエスの言葉を基準として行動しました。そこに主体性があります。

主体性とは、自分勝手に生きることではありません。どこに判断基準を置くかという問題です。

ペテロは最初、神の言葉を基準として立っていました。だからこそ、通常の常識や環境条件を超える歩みが可能になったのです。

### 3 風を見た瞬間に起こったこと

しかしその直後、聖書は次のように記しています。

しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助けください」と言った。（マタイ 14 章 30 節）

ここで重要なのは、「風が吹いた」ことではありません。湖の上ですから、最初から風は吹いていたはずです。つまり問題は、環境の変化ではなく、ペテロの視線の変化です。

最初、ペテロはイエスを見ていました。神の言葉を基準としていました。しかし途中から、彼は風を見るようになりました。すなわち、外的状況へと意識を移したのです。この瞬間、彼の内面で判断基準の移動が起こりました。

それまでのペテロは、「イエスが命じられたなら歩ける」という基準に立っていましたが、風を見た瞬間に「本当に歩けるのか」「こんなことは不可能ではないか」という考えが入り込んできます。

ここに疑いが生まれます。このときの疑いとは、単に神の存在を否定することではありません。神のみ言に基づいて立っている自分を疑うことです。

ペテロは、水の上を歩けなかったから沈んだわけではありません。すでに歩いていました。

問題は、外的環境を見ることによって、イエスのみ言に対する信仰が揺らいだことにあります。

そして、神のみ言を基準として立っていた主体性もまた、その信仰とともに揺らいでしまったのです。

## 4 誘惑とは主体性を失わせる働きである

この出来事は、本シリーズで扱ってきた「誘惑」の本質を非常によく表しています。

多くの場合、誘惑は「悪いことをしたくなる気持ち」として理解されますが、聖書的に見れば、その本質はもっと深いところにあります。

誘惑とは、人間の判断基準を神のみ言から別のものへと移動させ、主体性を失わせる働きなのです。

創世記3章において、エバは蛇の言葉によって判断基準を移動させました。本来は神のみ言を基準として立つべきでしたが、神に尋ねることなく蛇の言葉を受け入れ、その結果として墮落が始まりました。

ペテロの場合も同じです。最初はイエスの言葉を信じ、そのみ言に基づいて水の上を歩いていましたが、途中から風を見るようになり、外的環境によってイエスのみ言に対する信仰が揺らぎました。

そして、その結果として、神のみ言を基準として立っていた主体性もまた失われてしまったのです。ここに誘惑の働きがあります。

誘惑とは、神のみ言そのものを最初から完全に否定するのではなく、「本当に大丈夫なのか」「現実を見たほうがいいのではないか」という形で、人間の判断基準を少しずつ神から別のものへと移していくのです。

その結果、人は環境や恐れ、他者の評価、常識や時代の空気に左右されるようになります。神のみ言を基準として立っていた主体性が次第に失われ、内面は揺らぎ始めます。

この意味において、誘惑の目的は単に人を悪い行いへと誘導することではありません。神との関係を揺るがし、人間が神ではなく別のものを判断基準として生きようようにすることにあります。

だからこそ、誘惑に対する真の克服とは、外的環境を取り除くことではありません。どのような状況にあっても、神のみ言を基準として立ち続けることです。

そして、そのような歩みの中でこそ、人間の主体性は守られ、神と共に歩む信仰もまた保たれていくのです。

## 5 現代人もまた「風」を見ている

このペテロの姿は、現代社会に生きる私たちの姿そのものです。

現代人は常に「風」を見えています。SNSの評価、世間の空気、経済的不安、将来への恐れ、人間関係、ニュース、専門家の意見——そうした外的情報によって、判断基準が絶えず揺さぶられています。

もちろん現実を見ること自体が悪いわけではありません。しかし問題は、それ

が最終的な基準になることです。

本来、人間は神のみ言を基準として立つべき存在なのですが、現代社会では、多くの人が環境によって与えられた基準をもとに物事を判断しています。

「状況が悪いから無理だ」「周囲が反対しているからやめよう」「失敗するかもしれないから動けない」——このようにして、人は少しずつ主体性を失っていきます。

すると、外面的には生きていても、内面的には主体性を失い始めます。恐れに支配され、環境に振り回され、自分がどこへ向かうべきか分からなくなっていくます。

この意味において、ペテロが沈んだ出来事は、単なる過去の奇跡物語ではありません。現代人の霊的状态を映し出す象徴的な場面なのです。

## 6 真の信仰とは何か

では、真の信仰とは何でしょうか。それは、嵐が存在しないことではありません。風が吹かなくなることでもありません。信仰とは、風が吹いていても、なお神の言葉を基準として立ち続けることです。

ペテロは一度、その場所に立ちました。実際に水の上を歩いていました。つまり、人間は神の言葉に基づくとき、本来の限界を超える歩みへと導かれる存在なのです。

そして自分を信じるとは、この意味において理解されなければなりません。それは単なる自己肯定ではありません。「神の言葉に基づいて立っている自分」を信じることです。

この主体性を保つとき、人は環境に支配されません。恐れによって信仰が揺らぐこともありません。なぜなら、その基準が外部ではなく、神との関係の中にあるからです。

ペテロはその後、復活のイエスと出会い、再び立ち上がりました。沈んだことが彼の終わりではなかったのです。

イエスはあらかじめ、「しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った。それで、あなたが立ち直ったときには、兄弟たちをかづけてやりなさい」（ルカ福音書 22 章 32 節）と語っておられました。

神のみ言に立ち返るならば、たとえ一度倒れたとしても、再び立ち上がり、歩み始めることができるのです。

この意味において、ここに示されたペテロの姿は、挫折と回復を繰り返しながら、神のみ言を基準として主体性を確立していく信仰の歩みそのものを象徴しています。